【研究論文】

# 金鶴泳論
## ――小説『錯迷』から見る国籍の変更――

澤部　清

### はじめに

金鶴泳の小説『錯迷』は、一九七一年七月号の雑誌「文芸」に初出、掲載された。『錯迷』の執筆自体は、前作の『まなざしの壁』（一九六九年）直後から始めていたようであるが、日記によると、例のごとく、何度かの推敲を重ねるのに時間をかけねばならなかったことに加え、途中で壁にぶつかって執筆が前に進めず、中断して次作に予定していた『あるこーるらんぷ』の執筆にとりかかったということもあったという。それがどのような「壁」であったのかは日記にも記載はなく想像するほかはないが、この結果、『錯迷』の雑誌掲載は、金鶴泳の市役所での韓国への国籍移行手続き（一九七一年一月）後ということになってしまったのである。（それまでは「朝鮮」籍であった。）

この小説の書かれた一九七〇年前後というのは終戦から二五年を過ぎ、途中に朝鮮戦争（一九五〇年～五三年）を挟んで日本経済はその特需で大いに漁夫の利を得たのに対し、在日朝鮮人は祖国の分裂がもたらした住民間の反目が、だんだんと深刻な亀裂へと発展していった時期でもあった。

この時期、金鶴泳は、東大の大学院博士課程で化学工学の研究を行っていたが、同時に一九六六年に文藝賞を受賞して以降は作家として、年に一作ほどのペースで中編小説を発表していた。それらの小説の多くは、在日二世ではあるが日本で生まれ育った自分が、朝鮮人としての民族意識をちゃんと持てぬままにこの日本社会でいかに生きてゆくべきかと思い悩む姿を描いたものであった。日本の地元の学校では小学校以来学業の成績は優秀で、ずっと級長をやるほどであったのに対し、朝鮮は、祖国といっても一度も足も踏み入れたこともない遠い国であったのだ。

実のところ、作者を朝鮮から遠ざける別の理由もあった。その一つは、朝鮮という国については、彼の周辺にいた学生活動家たちを、小説『凍える口』の中で大学構内で出会った北朝鮮系の活動家金文基のことを「政治的人間」と揶揄した表現で形容しているように、作者にとっては「政治を除いたら何も残らないような干からびた共産主義者たち」の国であることと、後述の通り、何よりも嫌悪の対象である父親の信奉する国であることが大きな理由であった。

しかし、作者は、前作『まなざしの壁』を書く頃にいたり、この

間、担任教授の努力にもかかわらず、就職先がいっこうに決められないことなど、この差別と偏見に囲まれた日本社会においてこれ以上生きていく道が見つからないのなら、この先は自分の中の半チョッパリ根性とは決別し、自分の生きがいは、朝鮮の役に立つ方にしかないのではないかと思案し始めていた。（なお、半チョッパリとは、元々戦前朝鮮で日本人に対する蔑称として使われたチョッパリ（足割）に由来する。日本人が履いていた足袋、下駄が足先で分かれているのは獣のつま先みたいだというところが語源である。そこで、朝鮮人なのに日本人的なところを抱えている者を半チョッパリ（半日本人）と、これも蔑称として使った。）

現にこの時代にはまだ日本社会は、在日朝鮮人に対し、公的機関も私企業も就労の門戸を閉ざしており、七〇年代に至って差別を受けた当事者により法廷にその決着が求められた結果、やっとその理不尽な差別を違憲とする判決が出されたのであった[1]。ちなみに、作者は、この『まなざしの壁』の中で、主人公に次のように語らせている。

朝鮮人は、大学を出ても、就職することさえできない。その事実は、しかし、彼を慄然とさせた。日本に住む朝鮮人の置かれている現実を、心底から理解できたような気がした。これが朝鮮人なんだ、と彼は思った。日本の社会では、朝鮮人であるということは、それだけですでに、ある重荷を背負わされた存在なのだ。しかもその朝鮮人を日本人は、汚いといっては軽蔑し、貧乏だと言っては嘲笑い、非文明的で野蛮だと言っては憎悪する―

（『まなざしの壁』作品集Ⅱ二八七頁）

このように、『まなざしの壁』の終局には、迷いながらも自分の生きる道は日本にはなく、朝鮮に求めるほかはない、そのためにもっと朝鮮のことを知りたいと考えるに至った様子が描かれる。そして、これを受けて本作『錯迷』において、作者の朝鮮への接近の様子が描かれるのである。なお、金鶴泳の学生時代の一九六〇年代の前半、特に日韓条約締結前は、在日朝鮮人の六，七割が「朝鮮」籍であったこともあり[2]、『まなざしの壁』以前の作品においては、朝鮮戦争が話題の場合を除くと北朝鮮と韓国の峻別はせず、すべて「朝鮮」と記述されている。また彼の思考においても厳密な区分はないと思われ、朝鮮は全体として、「嫌悪すべき「政治的人間」たちの国であり「暴力的な父親」の信奉する国」であった。それが、この『錯迷』において、北朝鮮系の日本国内の組織の非人道的な実態や父親のこれ以上許容できない暴力的な有り様を思い浮かべる中で、北朝鮮を明確に峻別し、韓国の方へ思考が接近していく模様が描かれる。

小説は、作者を投影した主人公の在日二世の申淳一が、大学院を出た後で助手として勤務している仙台の大学の研究室に、学生時代に同級生だった鄭容慎が、ある日、八年ぶりに逢いにやってきた一日の出来事として描かれる。久しぶりに会う鄭容慎の登場により、

淳一は自分の学生時代を思い出し、それの連想は、当時も暗く陰惨であった実家のこと、そしてそこから逃れ出るように北朝鮮へ帰国した妹たちのことへと、回想は連なっていく。

ここに、この先自分の歩むべき道について思い悩む主人公申淳一の周辺で、自らのアイデンティティを求めてそれぞれに進む三者の生き方が、示される。一人は、日本に長く住みながらも、新たに建国された北朝鮮を祖国として信奉し、その発展を生きがいとして生きていく父親である。二人目は、一旦は、科学の勉強を修めようとわざわざ日本に留学してきたにもかかわらず、やはり祖国の統一と発展が自分の生き甲斐であると、勉強は放棄してその運動に専念している鄭容慎。そして三人目は、自らの幸せを求めて、親、兄弟や生まれて以来出たことのない日本を離れて、北朝鮮へ向かった妹。三人とも、長らく日本の地に住みながらも、この地を自分の生き甲斐を求める地とは定めなかった。その点、淳一は今日まで結果的に、日本とも朝鮮ともあいまいな関係のまま生きてきたことに思い当たらざるを得ない。今ここまで、半チョッパリであることに甘んじていたということは、自らのアイデンティティの問題を国家の問題と結びつけては考えてこなかったということ、つまりは、アイデンティティの問題を究極の課題として問い詰めてこなかったことに思い当たるのであった。だがもちろん、そうだからといって前から抱えている「生」にかかわる悩みを放り出すことはできない。今や、その双方の悩みを抱え、生きていくことしかないと思案し始めているのであった。

その意味でも、この小説は、金鶴泳が、このあと韓国国籍を取得し、国家の課題に携わることとなる、その前章とも解されるものと思われる。

## 一、鄭容慎の来訪

鄭容慎は韓国からきた留学生で、淳一と同じ応用化学の専攻であったが、学部の勉強を終えると学校を離れ、韓国系の在日組織の下で朝鮮統一推進運動の専従活動家としての活動を始めるようになっていた。今回もその関係で署名活動のために青森に行く途中で、仙台で降りたものであったという。

### ㈠ 学生時代の鄭容慎の思い出

申淳一の記憶にある学生時代の鄭容慎は、善良で素直で明るい韓国からの留学生であった。しかし、淳一が三年の学期末に過労で休んでいたおりに、見舞いにやって来た時に持ってきたクラス同人誌には、容慎の手になる随筆も掲載されていたが、その随筆は、淳一を感銘させるものであった。それは、森鷗外の短編小説『妄想』によせた随筆で、その『妄想』では、科学者であり文学者でもある主人公が、「生」の意味を求めて、科学書で得られる理論では飽き足らず、哲学書を漁り深めている様子が描かれているが、これによせて、当時容慎も応用化学の勉強をしていても、肝心な自分の生きていく道は手探り状態で、どうにも求め得ない「心の飢」について書

いたものであった。

「（略）いつも、化学する前にしなければならぬことが、何かあるような気がしている。やっておくべきことをやらずにいて、それをさしおいて実験しているような、後味の悪い気持ちが絶えずしている。ではそのしておかなければならないことというのは、何なのか、どんなことなのか、と考えてみるに、それがまた漠として判然としない。しいていえば、自分の生き方を、生き方の姿勢を確立する、というようなことになるのだろうか。その問題に何らかの結着をつけなければ、自分の気持ちがおさまらない。落ち着かない。（略）」

（『錯迷』作品集Ⅱ三〇六頁）

そのような「心の飢」は淳一自身も抱えていたものであり、この随筆を読んだ折に大いに共感するとともに、それまで何の屈託もない人物とみなしていた容慎を見直す気分であった。その後、卒業と同時に、在日韓国系の組織「K同盟」で活動を始めた容慎をみて、容慎なりの「心の飢」を満たす道を見つけたのだろうと、想像するのだった。

### ㈡　容慎らの活動を妨害する北朝鮮系の在日組織

仙台に到着したあと、淳一の研究室で語った容慎の話によれば、彼らがいま行っている南北朝鮮の平和的統一を進める在日朝鮮人の署名活動に対し、北朝鮮系の在日組織「S同盟」の一部の連中が、「南北の平和的統一」の推進活動は、S同盟の専管事項であるかのように、容慎たちK同盟の行っている署名活動をあちこちで妨害しているのだという。

淳一は、それを聞いて、「内心冷笑を禁じえなかった」。かねてから、祖国の平和的統一を図ろうと口先で主張してきたのは、S同盟であった。しかし、かつて学生時代にS同盟の傘下組織で活動した経験のある淳一にはそんなS同盟の体質には思い当たるものがあった。

彼らは、常に自分たちだけは正しく、「その特定の単一イデオロギーだけで、彼らは世界と人間のすべてが覆い尽くせる」と考えているようであった。常に正しい彼らは、淳一を「救済の対象」としか見なかった。その彼らの態度に、何か辟易せずにいられないものを感じた淳一は、そこから離れていった。

今、容慎から聞くS同盟の実態は、淳一が記憶する昔のS同盟そのものであった。常に自分だけが絶対で、他者を理屈抜きで凌駕しようとする態度は、S同盟の、つまりは北朝鮮の変わらぬ体質なのである。そしてそれは、淳一が嫌悪する父親の姿そのものであった。

## 二、申淳一の実家の家族

### ㈠　父親が支配する家族

鄭容慎が到着するまでの間、申淳一は、父親をはじめとする自分の家族のことを回想する。申淳一が生まれ育ち、今も家族が住む実

家は、北陸のY町にあると表現されている。

無学ではあるが[3]、商才のある父は、この地で朝鮮料理店を経営していた。店の経営は順調なようで、家族の経済的な心配はなかったが、時を選ばず不機嫌に母親と淳一や妹弟に対しても凄まじい暴力を伴う支配により、常に家中の陰鬱な空気が晴れることはなかった。特に母親に対しては、僅かな咎でも淳一の理解を超えるほどに執拗な暴力で責め続けるのであった。この父親の場合、外の日本社会で日本人に伍して商売をやっていくという緊張感を、うちの中で開放するという部分も大きかったのかもしれない。

しかし、この破天荒なほど暴力的な父親は、在日の多くの家庭に見られたという[4]。鄭容慎の韓国に住む父親も、容慎が「ちょっとへまをすると、すぐに鞭で打たれた」ほど恐ろしい父親であったという。その意味では、彼らの親の世代である在日一世の生まれ育った植民地時代の朝鮮にあっては、社会的にも儒教的な教義を背景に、家父長的な父親支配が当然のものとして浸透していたのであろう。だが、大学三年の春休みに帰省した折に、例によって、ひどく母をいたぶる父親に対し、淳一は、座視していることに我慢ができず、初めて、立ち向かっていった。

「何をするんだ」

父の前に立つと、私は父をにらみつけ、そう叫んだ。それは私が父に向って投げつけた、最初の怒声であった。私はもはやこの父に我慢ならなかった。この父と一緒に、どこへなりと堕ちていっても構わぬという気持ちだった。

（『錯迷』作品集Ⅱ三一九頁）

このように、決死の思いで父に立ち向かったのであるが、「長年の肉体労働」で鍛えられた父には成すすべもなく、馬乗りになられて殴られ顔中血だらけになって横たわるという結末となったのであった。

しかし、この淳一の父への行為に対しては、朝鮮人の間でも厳しい見方があることを、朴裕河が著作の中で紹介している[5]。彼女は、そこで評論家金両基の著作の次の一節を引用している。

「彼（金鶴泳）の作品を読んだ韓国の複数の旧世代の批判は、非難に近かった。「金鶴泳は日本人だね、韓国人ならあんなことをしない」と親に暴力をふるう主人公は小説であっても許し難いという。（略）」

このように彼女は、金鶴泳あるいは金両基（一九三三年生まれ）といった世代のもう一つ上の世代には、家父長制を柱とする儒教精神は抜きがたいものであることを紹介している。そしてそれどころか、朴裕河は、金両基自身も、金鶴泳について、「孝の精神を重んじる伝統的価値観が身についていなかった」と難じている点では、その旧世代と五十歩百歩であると指摘している。

また、小説の中では、被害を受けている当事者の母親も、この点では、淳一を訓諭する側に立っている。

母も父のいないところで私に向かい、「父ちゃんに手向かうのだけはやめとくれ」といった。たとえお前の方に理があっても、目上の人特に父親に手向かうなどは、非常にいけないことなのだ、といって私に注意した。朝鮮では特にそういうことに厳しく、そんなことをしたら人さまの信用をなくしてしまう、というのであった。

（『錯迷』作品集Ⅱ三二九頁）

このように、韓国人の精神に根深く浸透していた男尊女卑につながる儒教的論理については、韓国本土においてはその後の民主化政権の樹立後に次々と制度的な枠組みの改正が行われ、ジェンダー問題への取り組みが行われてきた。ただ、これに伴う思考面の切り替えについてはしばしば社会的な事件として報道されるとおり、更に時間を要するところであるが、それでも今日では、日本社会の一歩先を歩んでいるというのが大勢の見方である。

淳一の、父親についての回想はこれに終わらない。さらに、この冬休みに帰った折のことが回想される。

淳一が実家に帰った途端に、「表面懐かし気な笑いを浮かべて話しながらも、しかし父の顔と声には、どこか、私の胸を暗くしないではおかないような、何かが感じられるのであった。母に対する苛立ちが、また父の中にわだかまっているのだということを、私は、すぐに見てとった」のである。そしてそのあと、父と母の間に起きるであろう危機的な事態を回避しようとした淳一の神経を使った父との遣り取りのかいなく、二人の激しい応酬が始まる。

父と母の応酬は、すでに人間としてのいっさいの理性を、失い尽くしたかに見える。その凄まじくも醜悪な光景を見ているうちに、ふと私はいつかの夏の蝉を思い出した。蝉の声を掻き立てることによって、父母の激しい応酬の耳に入るのを、少しでも拒もうとしていた。（略）夫婦とは、このようにも醜く争えるものなのか。―醜怪な悪魔が跳梁している―気の遠くなっていくような感覚の中で私は思っていた―魔物は父の上に君臨し、母の上に君臨して、この家を翻弄している。（『錯迷』作品集Ⅱ三四一頁）

このような状況で、「私の心は、一種の真空状態に陥り、意思の制御の利かない彼方に押しやられたかのようであった。」という主人公淳一は、なおも母に殴りかかっている父の腕と襟首をつかんで、ぐいと押したところ、「父の身体は、妙に頼りなく、ぐらりとよろめいた」のであった。掴んだ腕も妙に肉を失っている感じで、かつて石をぶつけるように凄まじい勢いで殴りつけた、強靭な腕の面影はなかった。

そこに淳一は、父の老いを見て取った。いくら性質が、無神経で横暴なままであっても、肉体は、すでに老いを漂わせていた。そこに、淳一は初めて、父がこの社会で、日本人にあるいは在日朝鮮人たちに凌駕されることなく生き延びてくるには、今日まで淳一の想像を超えるさまざまな重みに耐えてきた歴史(6)の積み重ねであった

ことに思いが至るのであった。

しかし、この淳一の「理解」によっても、父親との距離の接近につながるということはなかった。このあとにも、くどくどと母の悪口をわめき続ける父の口元は、「どこか不気味で、醜怪で、じっと見つめていると、人間のではない何か化け物のそれのようにも思われてくる」というのであるから、以前と全く変わるところはない。このような関係にありながらも、父親と縁を切る、あるいは疎遠な関係となることができなかったのは、改めて言うまでもなく、作者は家庭を持ったあとも、終生父親に経済的な支援を仰いでいたからであった。そのような親子の経済的な支援は、決して一般的ではないと思われるが、いかがであろう。

## (二) 妹たちの北朝鮮への帰国

淳一の、学生時代に鄭容慎と別れた以降の最大の出来事として回想されるのは、八年前の上の妹の明子と、五年前の下の妹の紀子の北朝鮮への帰国であった。

八年前の春、明子が東京の淳一の下宿にやってきて、ふいにこの六月に北朝鮮に帰るつもりだと打ち明けたのは、淳一が卒業論文の追い込みにかかっている最中のことであった。

「あたし、いっそのこと北朝鮮に帰ろうと思うの。思うじゃなくて、もうそう決めているの。手続きはまだしていないけれど、六月に出る船に乗ることに、大体決まっているの。あたし、もういや、ああいう家にいるの。恐ろしくて恐ろしくて、気が変になっちゃいそう。それよりか、北朝鮮に行って一人で生きた方が、どんなにいいか知れない…」（『錯迷』作品集Ⅱ三三二頁）

いくらもうこれ以上あの陰惨な家に住みたくないといっても、一七歳の少女が親族も知人も誰一人いない外国に単身で行くというのは、大胆な決断であることに変わりない。しかし、それを聞いた淳一は、一瞬驚くことは驚いたが、すぐに、「その方がいいかもしれない」と賛成した。北朝鮮については、当時、「いまものすごい勢いで発展しつつある地上の楽園」であるといった情報(7)を断片的に聞いている程度の知識しかないが、もしそうでないにしても、「あの暗い家にいて、神経的に、精神的に虐げられることにくらべれば、一人ででも北朝鮮に帰って、そこで伸び伸びと生きた方が、ずっと幸福ではないか」と、判断したのである。

この淳一の判断の妥当性については後述するとして、この明子の決断自体が、いわば張り子のような脆さと繕いを持ったものであることが、明子が甲板に立って、まさに岸壁を離れようとしている時に露呈されるのである。

そのとき、甲板の上の明子の表情が、さっと変わった。それまで静かに無表情だった明子の顔に、急に動揺の色が走った。まるで自分はいま母や家族から一人離れ、見知らぬ土地に行こうとしているのだということを、はじめて真に悟ったかのごとく、私に

なじみの深いあの怯えの表情が、にわかに明子の顔に浮かんだ。すると、もはや母のことを「オモニ」と呼ぶようになっていたはずの明子が、突然、以前の明子に立ち返って、こう叫び始めた。

「お母さん、お母さん」（略）　（『錯迷』作品集Ⅱ三三七頁）

このように、別離に際して初めて、明子が、あの陰惨な家から離れるために自分が払わねばならない代償の大きさに気づき、悲しむのに対しても、淳一はなすすべはなく、明子と別れることとなった。

そして、下の妹の紀子は、その三年後の高校を卒えたばかりの時に、やはり一人で北朝鮮に帰っていったと、小説の中で一行のみで、触れられている。

この二人の妹の北朝鮮への帰国については、金鶴泳の実生活面では、他の小説には触れたものはなく、また、当該時期の日記は公表されていないのでその詳細はわからないが、一九六五年一一月の公表された日記には、「静愛（下の妹）が朝鮮に帰国してから、ちょうど一年になる。」との記述があるので、時期的には合致しているものと思われる。

このように、二人の妹の帰国については、日記や他の作品にはないにしても、また、時期的には『錯迷』のずっとあとになるが、のちに勤めることとなる韓国系の日刊紙「統一日報」のコラム欄には数回妹たちの北朝鮮への帰国を扱った短文があり、この帰国が決して彼女らに幸せな顛末に至らなかったことを記している。特に、一九七六年九月のコラムには、上の妹が、インスタントラーメンを送って欲しいと言ってきたのに対して、まだ日本の食い物が恋しいのかと笑いながら送ってやったのだが、やがてそれは北朝鮮の食糧事情のせいだとわかり、ついには妹本人が栄養不良で結核を病んでいるという状況にあることを知ったことを記している。

北朝鮮への帰国の第一船は一九五九年一二月に始まり、八四年に終わるまでに総計九万三千人あまりが帰国したが、早くも六二年頃には、北朝鮮の経済事情、食糧事情が楽園には程遠いという実態[8]が伝わり、同年以降帰国者は激減した[9]。

淳一が明子から帰国の意思を聞かされた時（そして、実際に作者の妹が帰国した時）は、一九六〇年であったのでそのような北朝鮮の国内事情に通じておらず、淳一が上述の通り、無責任とも思える返事をしてしまったことは、やむを得なかったとも言えるかもしれない。

しかし、作者の、みすみす妹たちをそのような地に送り出してしまったという悔悟の思いは大きく、それ故に、このコラム欄で何度も触れることとなったのであろうし、そもそも、その情報統制を図る北朝鮮の体質が彼自身が国籍を韓国に選ぶ、一つの大きなインセンティブともなったものと思われる。

## 三、仙台での鄭容慎との別れ

予定通り、その日の十時過ぎの汽車で青森に向けて発つ鄭容慎と

二人で、それまでの時間を繁華街の料理屋で過ごした。そこでも容慎は祖国の統一の必要性とそれに向けた活動に自分が積極的に関わることの意義を「一種熱気を帯びた」調子で語るのであった。そこには、昔エッセイに書いていた「心の飢」なるものは跡形もなくなっていた。

それを聞いた申淳一は、容慎に比べるまでもなく、自分が朝鮮人であるにもかかわらず、少しも朝鮮人として生きていない、「朝鮮」と無縁のところで生きようとしているところに、自分の空虚感の源があるのではないか、しかも父から逃げようとしているために、ますます朝鮮から遠ざかろうとしているのだと、思いを巡らすのであった。

そのような思いを抱きながら、淳一は容慎の語るところを聞いていた。

飲食の最中、鄭容慎は相変わらず朝鮮と、日本と、それから世界の政治情勢のことを飽くことなく語り続けた。そしてとどのつまりは、そうした状況における、彼の組織が推進している統一運動の、意義と展望に落ち着くのだが、それを彼はいくつもの面から確認していくのだった。あらゆるものを、彼は彼の論理によって裁断し、裁断された事柄に、疑問の余地はない。人間や世界の姿は彼の前に明瞭なものとしてあり、彼にとっての課題は、その明瞭な姿を見せている世界に人間をどう対応づけ、動かすかにある…。

（『錯迷』作品集Ⅱ三四六頁）

鄭容慎が、このような話を、活動家にありがちな調子で語った時、以前の淳一であったならば、「君はそういうけど、しかしそれは単に君がそう思い込んでいるにすぎないのではないか」と、口を挟むところであったが、この時の淳一は「適当に相槌を打つばかりで、彼の話に口を挟むことはしなかった」。そして、「自分の中に閉じこもったままの私であっても、やはり一個の朝鮮人には違いない以上、朝鮮の平和と朝鮮の統一が望ましいことには、変わりはないのである」と、一〇人分の署名用紙を引き受けたのであった。また、別れ際には、「青森から帰るときは、また仙台で途中下車しろよ。もっとゆっくり飲もうよ」と誘っているのであった。

この淳一の語るところは、作者の心情を代弁したものであるが、常々本人も云っているように、作者は決して人付き合いのいい方ではなく、ましてや、友人であっても朝鮮人を自分から「また一緒に飲もう」と誘う場面などは、皆無であったはずだ。この間の淳一の言動には以前と異なって、韓国との距離を縮めようという思いが感じられるところである。

**おわりに**

この小説が執筆された一九七〇年前後は、欧米や日本等において、旧態然とした社会システムに対し、戦後教育の中で人権についての新たな思考を身に着けた若者たちが異論の声を上げ始めた時期であった。それはまた、第二次大戦後に大国間の対立によって生じ

た東西冷戦体制のもとで、やがて大きな地殻変動に及びかねない小さな衝突が世界のあちこちに生じている時期でもあった。朝鮮半島の情勢もその例にもれず、前述の通り五三年の休戦協定ののちも両国間の緊張状態は緩むことなく、一触即発の危機的な状況は依然としてかわることはなかった。そのために、北朝鮮の金日成、韓国の朴正熙ともに、国内の政治体制の引き締めを一層強めている時期であったが、日本へは、北朝鮮の国内事情についての情報は殆ど伝えられていなかったのに対し、韓国国内での、特に反共を柱とする思想統制がますます厳しさを増し、多くの政治家や文化人がその標的とされているとのニュースが伝えられていた。

日本に住むいわゆる在日作家の多くは、戦後も、戸籍上は北朝鮮、韓国の包括的な地名としての「朝鮮」籍のままとしていた。つまりは、南北が分断された状態を克服して、朝鮮半島の朝鮮民族が南北統一を目指す「朝鮮」籍なのである。ただし、当初、作家としての活動は朝鮮総連のもとで行っていた。しかし早くも一九五〇年代から総連による彼らの活動に対する激しい干渉、意見対立が繰り返される中で、金達寿、金石範、金時鐘らは総連と決別した。また、総連職員であった李恢成は、総連内部の人事紛争に嫌気がさし、六六年に脱退した。しかし他方、彼らはまた、戸籍を韓国籍に移すことを拒否していた上に、韓国の軍事色の強い政権が、民主主義を求める自国民を弾圧している実態に批判的な見解を明示していたため、一九八〇年代まで、韓国への入国も閉ざされており、戸籍の面も変更することはなかった。そして、八〇年代末から九〇年代にかけ韓国の民主化を見極める中で、金時鐘や李恢成らはやっと順次「韓国」籍に移行したが、金石範らのように、南北両国が統合するまでは片一方に与しないと、「朝鮮」籍そのままの作家も存在している(10)。

そんな中で、一九七一年の時点で作家金鶴泳がなぜ韓国を選んだのか。前述の通り、この時期には、周辺の在日作家は大半が、「反韓国」の立場であったと思われるが、彼らと相談あるいは意見を交わした記録はない。また、金鶴泳が、韓国の政治状況に関心がなかったとは考えづらい。このすこし前に発表された『緩衝溶液』(一九六七年)では、一九六〇年の李承晩退陣を決定づけた韓国国民の大規模抗議活動を詳しく扱っている。ただこの間の韓国行政の中で、金鶴泳にとっては承服し難い政策が出されていたとしても、他の在日作家のように自分の見解を自ら公にするような行為は全くなかったことも事実である。彼の性格にその理由が求められるかもしれないが、移籍後のスムーズな活動の開始をみると、周辺の韓国人との間で国籍移行に向けてのそれなりの下準備が進められていた可能性も否定できない。

日記には国籍をこのままにしておくと、行政的には「朝鮮」籍は「北朝鮮国籍」とみなされるため、子供を北朝鮮系の「金日成崇拝の学校」(11)に行かせたくなかったことを直接的な理由として記している。だが加えて、北朝鮮を忌避した理由として、上述の、妹たちの北朝鮮における惨めな非人道的な処遇といったことが当然に浮かび上がる。しかもこのことを全く報道しないこの国の言論の統制と

いった体質は、金鶴泳には相容れないことであった。
また日記には、この国籍を移すことによって、父親が怒ってこの先の支援を打ち切ることはないだろうかという懸念を記している。父の存在は、北朝鮮を忌避する大きな理由であったが、同時に経済的な依存という意味からは、作者には不可欠な存在であった。しかし、八年前に、父と母の喧嘩を仲裁しようと父に歯向かった時もその懸念をしたが、その後の授業料と生活費の送金を止められることはなかった。そんな経験からも、結局は、父の意向は忖度しないで戸籍の手続きをおこなったのであるが、幸いにも、その後の支援の送金は引き続き行われた。

そんな経緯を経ながらも、手続き後約一年を経て翌年の四月には韓国国籍を取得した金鶴泳は、その五月には初の韓国旅行に旅立ち、さらに翌年二月には韓国系日刊紙を発行する「統一日報社」に入社し、韓国系のオピニオンリーダーとして活動を開始する等、順調な滑り出しを見せている。

しかし、彼は以前からの「生」と「死」の狭間に関わる苦悩から解放されたわけではない。この先も、その「生」の課題と新たに抱え込むことになった「政治的課題」の双方にまた裂き状態になりかねない人生を歩むこととなるのである。

**注**

(1) 日立製作所入社を拒否された在日朝鮮人朴鐘碩が横浜地裁に提訴した裁判は、七四年に不当差別を違法とする判決が初めて出された。（朴鐘碩他『日本における多文化共生とは何か』新曜社二〇〇八年）

(2) 水野直樹・文京洙『在日朝鮮人』（岩波新書二〇一五年）

(3) 一九三〇年に行われた植民地朝鮮の国勢調査によると、普通学校への就学率は推計で男子二六・三％女子七・五％であったというから、学校には全く通っておらず文字の読み書きができないこの父親は特別な例ではない。（趙景達『植民地朝鮮と日本』岩波新書二〇一三年）

(4) 凄まじい暴力で特に母親を責め、家族を制圧する父親の姿は、金鶴泳以外にも多くの在日朝鮮人文学に登場する。梁石日『血と骨』（幻冬舎一九九八年）、李恢成『またふたたびの道』（講談社一九六九年）等、枚挙に厭わない。

(5) 朴裕河『ナショナルアイデンティティとジェンダー』（クレイン二〇〇七年）

(6) 金鶴泳の後の小説になるが、父親が日本人従業員の不正に対し「あの野郎俺が字を知らねえと思って嘗めやがって」と歯ぎしりする場面（『鑿』）等が、いくつも見られる。

(7) 大量の帰国者によって事業が成功するために、朝鮮総連が「地上の楽園」のプロパガンダの一翼を担った。（テッサ・モーリス・スズキ著田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス』（朝日新聞社三〇〇七年））などによる。

(8) 関貴星『楽園の夢破れて』（亜紀書房一九九七年元版は全貌社

一九六二年）同書の著者らは六〇年八月に北朝鮮を訪問し、帰国早々の帰国者たちの生活実態を見ようとしたが、当局による制約で実現したのは一部だけであった。そして、日本にいる身内などに検閲をくぐって送ってきた手紙を併せて読むと、事前に聞かされた「地上の楽園」とは程遠く、基礎的な生活物質、食糧も枯渇している惨めな生活を強いられている帰国者たちの実態であった。このような実態は、六一頃から日本国内でもだんだんと知られるようになった。

(9) 六〇年四万九千人、六一年二万二八百人であったものが、六二年には三千五百人になっている。金賛汀『在日コリアン百年史』（三五館一九九七年）

(10) 中村一成『思想としての朝鮮籍』（岩波書店二〇一七年）

(11) 日記一九七〇年十二月三日（作品集1五三四頁）

付記　金鶴泳の本文の引用は、「金鶴泳作品集」全二巻（クレイン二〇〇四～二〇〇六）によった。

（さわべ　きよし・明治大学大学院博士後期課程在学）

## 『明治大学日本文学』第二十号〈記念特集号〉

＊一九九二年八月刊＊


「明治大学日本文学」第二十号の刊行に際して　大野　順一
二人の英雄神に関する一考察　遠藤　浩
『宝物集』注釈のための試解（一）　山下　哲郎
二万郷説話の考証
浮上する家族〈知識―権力〉としての『門』　野本　聡
『こころ』論〈孤児〉と〈新しい女〉　松下　浩幸
中西伊之助論　生涯と文学　呉　皇禪
堀辰雄「不器用な天使」論　大坪　利彦
他者意識をめぐって
小説家　中村光夫　高橋　恒久
田村俊子・野上弥生子参考文献目録・補遺（二）　坂　敏弘
〈修士論文要旨〉〈通巻目次〉〈日本文学専攻提出論文一覧〉
〈明治大学日本文学研究会会則〉